

森林管理者の協力による効率的なエゾシカ捕獲

明石信廣・南野一博

はじめに

北海道では、エゾシカの増加にともなって1990年代から森林被害が増加し、忌避剤や各種ネットなどの資材による防除が行われてきました。近年は造林地を囲む防護柵の設置も進んでいます。これらは造林地を守るには有効でも、育林経費の増加につながる一方、今後のエゾシカ被害軽減にはつながりません。問題の解決には、エゾシカの生息密度を低下させる必要がありますが、これまで森林管理者や林業関係者は、狩猟者に入林許可を出すほかには、エゾシカの捕獲にはほとんど関わっていませんでした。むしろ、森林内で事業を行う際の安全確保を優先して、狩猟者の入林を禁止しているところも多く、そこにエゾシカが逃げ込むことがエゾシカを減らすのを難しくする一因ともされてきました。

エゾシカが増え続ければ、森林被害も増加するばかりです。造林地だけでなく、天然林でも後継樹が育たず、影響は高山帯などの貴重な自然植生にも及んでいます。エゾシカの主な生息地は森林ですから、エゾシカの捕獲には森林管理者の協力が不可欠です。森林管理者はエゾシカ捕獲のために何ができるのでしょうか。

狩猟者による捕獲をうながす

これまでも今後も、エゾシカ捕獲の担い手の中心は狩猟者です。狩猟関係者に、捕獲を増やすために森林管理者に期待することを尋ねると、エゾシカのいる森林に入られるようにしてほしい、との声が多く聞かれます。北海道内の多くの市町村では狩猟期間は10月から3月までとされていますが、積雪が多くなると車両での入林ができず、狩猟ができる範囲が限られてしまいます。そこで、北海道の国有林や道有林では、平成21年度から狩猟者のための林道除雪が行われ、多数のエゾシカが捕獲されています。

一方、森林では冬季にも間伐、主伐などの事業が行われているところがあります。林業従事者からは、「近くで銃声が聞こえて怖かった」など、不安の声が聞かれます。実際に、過去には林業従事者が死亡する事故もありました。事業のために林道が除雪されれば、狩猟者にとっても有効なのですが、そのためには、事業の進捗状況に応じて狩猟が可能な範囲、時期を柔軟に定め、狩猟者も順守する必要があります。森林にエゾシカ被害が発生し、エゾシカの個体数管理が必要になった時、狩猟者による捕獲は、森林管理者が大きな予算をかけずに実行できる有効な手段であり、捕獲をうながすためには、狩猟者の入林に対して便宜をはかるだけでなく、積極的に関係者間の調整を行うことが必要です。

管理型捕獲

森林の中には、事業の実施のための狩猟禁止区域だけでなく、希少鳥類の繁殖などのため入林を禁止している区域や、鳥獣保護区に指定されている区域もあります。このような場所は狩猟ができないためエゾシカが集まりやすく、森林被害が著しいことも少なくありません。一般の狩猟者による捕獲ができない場所では、森林管理者等による管理のもとで、捕獲従事者に依頼して捕獲をする「管理型捕獲」が必要になります。

エゾシカを捕獲する方法として、銃器のほか、くくりワナやさまざまなタイプの囲いワナがあります(写真-1)。まず、現地のエゾシカの生息状況や地形、アクセス、捕獲の担い手確保などの条件に応じた捕獲手法を検討します。北海道では銃猟が一般的ですが、地形などの条件が銃猟に適さない場合や、エゾシカが日中に出没せず主に夜間に活動する場合は、ワナ猟も有力な選択肢になります。ここでは、



写真－１ さまざまな捕獲手法

(左) 管理型の銃猟であるモバイルカリングでは、開始前に綿密な打合せを行う。(中) エゾシカを誘引中の大型囲いワナ。(右) くくりワナと捕獲されたエゾシカ。

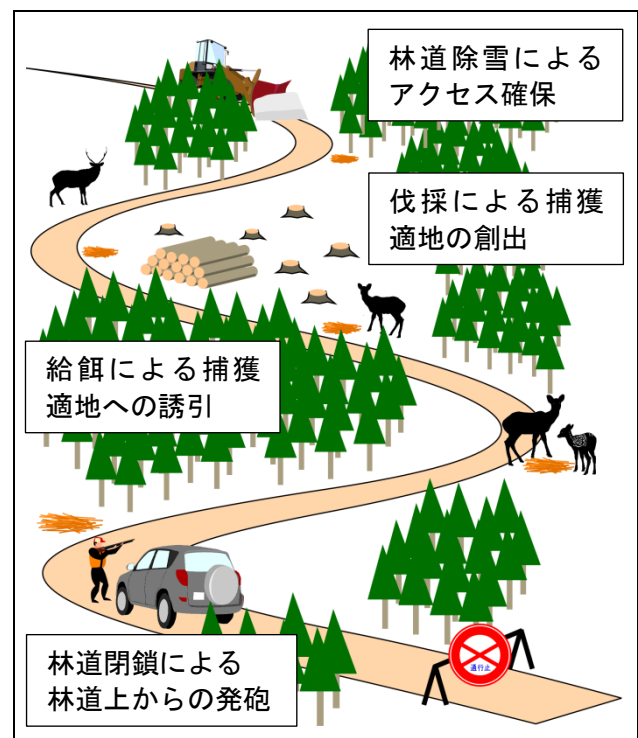
北海道立総合研究機構が酪農学園大学、北海道、占冠村などとともに検討をすすめてきた管理型の銃猟である「モバイルカリング」について紹介します。

モバイルカリング

モバイルカリングとは、移動するという意味の「モバイル」と、個体数を間引きするという意味の「カリング」を組み合わせ命名した造語で、森林管理者による厳重な安全管理のもと、除雪した林道脇に複数の給餌場所を設置し、誘引したシカを林道上で車両内外から狙撃し効率的に捕獲する手法です(図－1)。

まず、モバイルカリングを実施する林道を決め、その期間中は関係者以外が立ち入らないようにします。通常の捕獲では、公道上からの発砲は法令で禁止されていますが、森林管理者が管理する林道は、関係者以外の立入りが無いなど安全が確保されれば、林道上からの発砲の許可を受けることができます。停止している車両上からも発砲が可能であるため(写真－2)、エゾシカを発見できれば直ちに狙撃することができ、捕獲効率を高めることができます。

現在は、法令により、日出前及び日没後においては、銃器を使用した鳥獣の捕獲等をしてはならないとされており、日中にエゾシカを捕獲しなければなりません。しかし、特に狩猟が可能な地域では、エゾシカは夜間に行動することが多くなり、日中の捕獲が難しくなっています。そこで、モバイルカリングでは、毎日午前中の決まった時間帯に給餌を行い、エゾシカを誘引します。エゾシカが餌場に定着したら、数時間で無くなる程度の量を給餌するのが重要です。こうすることによって、



図－１ モバイルカリング



写真－２ 法令による許可を受けて停止した車両上から発砲



写真－３ 餌場に集まったエゾシカ

エゾシカが給餌の時間帯を認識して日中に餌場に来るように誘導できれば、捕獲実施時にエゾシカに遭遇する可能性が高まります。

また、餌場に自動撮影カメラを設置することで、いつ、どのくらいのエゾシカが餌場を利用しているかを知ることができます(写真－3)。このように、エゾシカの行動について情報を収集することは、捕獲効率を高めるには不可欠です。

捕獲を実施する林道は、除雪されて車両が通行できなければなりません。給餌開始から捕獲終了まで、林道除雪を継続することは、森林管理者にとっては大きな負担になる場合もあります。そこで、冬期の伐採等の事業と組み合わせることが有効だと考えられます。事業実施箇所は狩猟のための入林が規制されていることが多いのに加え、エゾシカの餌資源が乏しい地域では、伐採された樹木の枝条をエゾシカが餌として利用することもあります。事業が休止となる日曜日に実施するモバイルカリングを「サンデーモバイルカリング」と名付けています。捕獲のための除雪を要せず、狩猟の規制のために集まったエゾシカを捕獲することができるのに加え、事業者にとっても、森林管理者の管理のもとでの捕獲は、一般狩猟者が自由に捕獲するのに比べて抵抗感が少ないものと思われます。

エゾシカ捕獲は、人とエゾシカとの知恵比べです。まず、対象地域のエゾシカについて良く知らなければなりません。昨年捕獲できた場所でも、なかなかエゾシカを見ることができない場合もあります。多様な関係者が力を合わせて、結果を反省し、手法を改善しなければなりません。捕獲のための場所選定、給餌、誘引状況の確認、現場での狙撃などについて、これまでの実施事例の解析に基づいて技術が蓄積されていますので、新たに取り組む地域では、これらの情報を参考にすることが重要です。

捕獲個体の回収・運搬・処理

エゾシカを捕獲すれば終わりではなく、回収して処理施設まで運搬し、食肉等として有効活用する、あるいは廃棄物として処分する、というところまで、あらかじめ検討しておかなければなりません。木材については、木材の生産から利用までの流れを「川上から川下まで」と言うことがあります。エゾシカについても、捕獲から利用、処分まで一連の流れが確立されなければ、対策が進みません。地元の狩猟者や市町村は、地域の条件に応じた処理を行っていますので、関係者との情報収集と連携体制の確立が求められます。また、受け入れ施設によっては、受け入れ可能な日や時間帯、狙撃部位などが指定されることもあり、その条件に捕獲方法を合わせる必要があります。

野生動物管理の新たな時代

近年、強度の捕獲圧によって、エゾシカの個体数は頭打ちから減少へと転じていますが、個体数が少なくなるほど捕獲しにくくなり、効率的な捕獲のためには森林管理者の協力が必要になります。森林被害の状況をみると、まだまだエゾシカを減らす必要があります。

2014年に、「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」が「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」へと改正され、2015年5月に全面施行されることになっています。この改正によって、「認定鳥獣捕獲等事業者」の制度がつくられ、今後、捕獲の担い手に加わることになります。また、2014年から、国の森林整備事業でも、森林の保全を目的としたシカの捕獲に対する支援が受けられるようになりました。森林管理者にとっては、エゾシカを誰かに獲ってもらうのではなく、自らが森林被害防止のためにエゾシカ捕獲をする時代になったと言えます。

森林内で効率的にエゾシカを捕獲するのに必要なことは、森林管理とエゾシカ捕獲、捕獲個体の処分など、多様な関係者の間の調整を図ることです。森林管理者にとっては新しい分野ですが、今後は、森林を保全し、育てるためにも、必要不可欠なものになるでしょう。

モバイルカリングの詳細については、林業試験場のホームページに「モバイルカリングの手引き」を掲載していますので、ご活用ください。

<http://www.fri.hro.or.jp/01sigen/pdf/mc2014.pdf>

(2015年4月以降は<http://www.hro.or.jp/list/forest/research/fri/01sigen/pdf/mc2014.pdf>)

(森林資源部保護グループ)